

法然上人讃仰会

2010

monthly
JÔDO

December

12

福智道心



笑顔 育て

朝は カーテンを開けて 朝日を浴びて

笑顔を 育てる

仲良しの 友達に会って 楽しく 街中を 歩く

凄く綺麗な 花を見て センター街を歩く

なんか 不意に 楽しいことがおきる

あたしじゃなく あたしの友達に いい事が起こる

嬉しい事 いい事 夢が叶う事

これは 笑顔にとって 大事な栄養

笑顔を 育てるには、いい事を いっぱい増やそう

笑顔、育て！

明るく 育て！

そして みんなを 幸せな気持ちに 近づけよう！

表紙の人と書

北村宗介・書家

『浄土』2010年表紙の

1958年静岡県生まれ。北海道大学卒業。書詩家木村三山に師事、書、篆刻を学ぶ。
宮部みゆき著『孤宿の人』、火坂雅志著『軍師の門』、第140回直木賞受賞山本兼一
『利休にたずねよ』等、題字揮毫多数。
筆一本書法ライブ「辻書法」を各地で公演。

12月の書

かんざしんじゅ

歓喜信受

この教えに出会えたことを
皆心から喜んだ。

何の心配も要りません。

安心していいのです。

この世での一番の不安を解消してくれました。

心の底から喜び、この教えを実践して行
きましょう。
(編集部)

浄土

2010/12月号 目次

成道会に思う	奈良康明	2
小説快僧 渡辺海旭	前田和男	8
会いたい人 柳家小満んさん①	関 容子	18
響流十方	小村正孝	26
江戸を歩く第37回	森 清鑑	30
法然上人をめぐる人々⑦	石丸晶子	36
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネツ	かまちよしろう	47
編集後記		48
表紙裏 茜の詩	新納 茜	
背表紙裏 教えと法話	生野善應	

表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎



成道会に思う

万物無常から
私が無常へ

奈良康明

(財)東方研究会常務理事
駒沢大学名誉教授

1. 釈尊への問いかけ

十二月八日の成道会になると何時も思い出す体験がある。

曾てインドのカルカッタ大学に留学していたころのことである。

ベンガルの農村を歩いていて、素晴らしい風貌と魅力的な雰囲気の中のヒンドゥー教の行者に出会った。三十歳台半ばかとも思われたが、上半身裸で、大きな菩提樹の実の数珠を肩からかけている。やせぎすの身体は引き締まっただけで、修行に明け暮れる宗教者にふさわしい感じだった。私が特に惹かれたのはその風貌だった。見ひらいた目は黒々と輝いて、まっすぐ前を見つめていた。鼻筋通り、引き締まった口元。ベンガル人独特の穏和な風貌の中に知的な表情があふれ、同時に、なんとも言えない温かさが漂っていた。小さな荷物を短い棒の先に結んで肩にかつぎ、わき目もふらず、従容として歩く姿には目を見張るような風格があった。見はれていて私の前を通り過ぎ、次第に姿を小さくしていったのだが、いつしか、私のこの行者に釈尊のイメージをだぶらせていた。

「釈尊もこんな素晴らしい雰囲気歩いておられたのではないだろうか」という思いが抜けなかった。

この時以来、仏典を読んでいて「釈尊曰く」とあると、この行者の顔がでてくる。その顔が私に語りかける。仏典の中の説法者の顔が具体的にイメージされているだけに、どうだと聞かれているような気がするから、私も応答していく。何でそんな考え方になるんですか、とか、どうしてそう考えなくちゃいけないんですか、とか、お釈迦さんは世捨て人だから欲望を捨てよなんて平気でおっしゃるが、社会内の存在である私などには無理じゃ

ないですか、などと反撥していく。反面、なるほどお釈迦さんそうですね、よくわかります、などと言ったりする。わかった、と思ったことが半年も経つとわからなくなったり、わからなかったものがわかったような気がして、ああ、お釈迦さん、これでいいんですね、などと答えたりしていた。

何時しか、私は文献を通じてだが、釈尊と会話を交わすようになっていた。

こうした文献の読み方は、ふと気がつく、と、仏典に接する私の姿勢に大きな変化をもたらすようになっていた。教理学として学んだ理論の枠組みに血が通い、肉付けされ、自分が生きるという脈絡の中で考え、受け止めるようになった。自分が生きる、ということは仏典の教えを自分の主体に引き寄せて考えることである。

同時に仏典もこうした自己実存の立場からの問題の投げかけに十分にこたえてくれるものであることが頷かれてきた。強く叩けば叩くほど、深まった奥行きを示してくれるのである。

2. 主語を一人称として読む

諸行無常という言葉がある。三法印さんぽういんの一つで仏教徒ならどなたでも知っているし、その意味も難しくはない。多くの方はこう理解されているであろう。すべてのものは絶えざる変化のプロセスにあり、とどまることがない。これは普遍的な真実であり、科学的にも証明されている。そして、仏教の拠って立つ真実である。

しかし、実は、ここで終わっては釈尊の教えた無常にはならない。

釈尊に問いかけ、何故無常を言い出さなければならなかったのですか？と訊きただしていくと、ここには釈尊の悩みと修行、そして悟りの軌跡が深く関わっている。

釈尊は老・病・死に悩んで出家し、修行し、悟りを開いて救われたという。その悩みとは思いついてほしいという自我欲望と、思い通りにならない現実とのギャップだった。釈尊は自我に悩んだのである。そこで釈尊は「六年の難行苦行」の修行によって自我を一度は徹底的につぶした。だからこそ、菩提樹下の瞑想で真実に目覚めて「覚者」になることができた。

その結果、自分の悩みとは、一言で言えば、自我欲望と無常の現実とのギャップであることに気づかされた。欲望とは「ナイモノヲネダリ」、「カギリナクネダル」ものである。無常なる現実はどうした欲望に応え得ないことのほうが多い。無常という真実を素直に肯がえない愚かさ（無明）と野放図な自我欲望が自分の苦悩、悩みの原因であることを釈尊は知ったのである。

だからこそ、釈尊は後に弟子のアーナンダとこういう会話をしている。爪の上にわずかばかりの土をのせて、これっぽっちのものでも無常でないものはあるかと訊く。アーナンダが、いいえ、どんなものでも無常でないものはない、と答える。そこで釈尊は無常だからこそ私たちは心を浄め安んじることができるのだ、と教えている。科学的無常では、心を浄め、安んじることとは無関係であろう。無常だからこそ私たちは自我欲望を振り回して悩むし、逆に無常を自分の問題として受け止めるところに「安心」の生活を送ることが出来る。

無常という普遍的な真実を宗教的真実に昇華したのが釈尊だったのである。

私たちが釈尊にかえるというなら、釈尊の真意を汲まなければならない。無常が科学的真実で留まっていたは困るのであって、私は「諸行無常」という句の主語を「諸行」という三人称から「私」という一人称に代えて、「私が無常なのだ」と受け取らなければ仏教にならないと信じている。諸行無常は「そうですか」と受け止めておけばいい。客觀的事実として仏教の教えは科学的ですね、と他人事のように言っておけばよい。

しかし、私が無常だ、と言うと、途端に、無常は私が現実**に**ぶつかり、悩み、解決してゆくべき実存の問題に成り代わる。それをこそ釈尊は教えているのである。

仏典に無常に関する教えは多い。自分の生活の場で「無常を生きる」時、最初はいまよくいかながが努力しているうちに、無常を生きることに「熟して」くる。理論として無常を理解し、科学的真実にとどめておいては、本当の意味で釈尊の教えをうけが、成道を**壽**はぐことにはならない。

言葉で示された教えは氷山の一角にすぎない。海面下にあつて、見えないけれども、氷山を支えている大きな部分がある。それこそが釈尊自らが体験した悩みであり、修行であり、悟りであり、そして私たちが自分の問題として受け止める部分であろう。「万物無常」はいったんそう理解したらそれ以上のものではない。しかし、「私が無常」なら、その内容は限りなく深まり、熟していく。そのプロセスこそが釈尊の成道につらなるものに違いない。

平成23年新年号

月刊『浄土』

通算850号記念

宗祖 法然上人
八百年大遠忌
特集

◆
随筆

《法然上人と今》

町田宗鳳 阿満利磨
ひろさちや 石丸晶子
石上善應 他・豪華ラインナップ

乞御期待!!

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第十九回

第二部

欧州航路船上の人となる



これまで、本連載では、渡辺海旭ゆかりの多種多様な人々が、海旭の死後、海旭を取り上げたNHKのラジオ番組を聴き、あるいは海旭の留学先を訪ねることのでつくられた「海旭との出会い直し」を、大胆な推測を交えた小説仕立てで紹介してきた。

そこで明らかになったのは、多元的で多義的な海旭像とともに、いったい海旭とはいかなる存在だったのか、ますます深まる謎であった。

同じように海旭と出会い直し、海旭の知られざる一面を明かしてくれそうな人々はまだまだいる。たとえば、弔辞で海旭を「学者よりも寧ろ教育家、教育家よりも寧ろ世相改善家であった」と評した孤高のジャーナリスト・徳富蘇峰、海旭を自らが乗り越えるべき「壁」であり文学的テーマだとした甥で戦後を代表する作家・武田泰淳、その武田泰淳の父親と海旭の妹を争い後に増上寺法主となる

椎尾弁匡、芝中で海旭に薫陶をうけ、「僧服をまとうては仏教界の大導師であり、僧服を脱しては純乎として純なる江戸っ子の代表者であり、また熱情に富める有志家気質の持ち主であり、愛国の至情もゆるがごとき典型的志士」と評した仏教学者・増谷文雄など。彼らを「語り部」に起用すれば海旭像はより陰翳を増すであろうが、謎もまた深まる。であれば、そろそろ巨いけれどぼんやりとして焦点の定まらぬ海旭像の「照らし出し」を急ぐとしよう。

相馬黒光らが耳を傾けたNHKのラジオドラマから五十年前も前、井上靖がストラスブルクを訪れたときからおよそ八十年前、海旭自身がアイデンティティを確立したドイツ留学時代に立ち返り、徳富蘇峰、武田泰淳、椎尾弁匡、増谷文雄らの海旭像もそのなかでふれながら、海旭の実像に迫っていくことにしよう。

欧州航路船上の人となる

明治三十三年（一九〇〇）、五月五日、渡辺海旭は、四年前に就航したばかりの欧州航路の船上にあった。海旭二九歳、浄土宗第一回海外留学生に選ばれてドイツは来江（ライン）河畔の古都・ストラスブルクへ向かう榮えある出立の日であった。

欧州航路は、明治二十九年（一八九六）、政商・岩崎弥太郎の日本郵船によって国の肝いりで開かれたもので、毎月一回横浜を出港する定期便。神戸―香港―コロンボ―ポートサイド（エジプト）―マルセイユ―ロンドンに寄港、終着地はオランダのアントワープである。海旭が乗船するのは讃岐丸。英国はスコットランドの造船所で建造され、明治三〇年に就航。総重量六一七トン、船長一三五・六メートル、船幅一四・九メートル、喫水一〇・三メートルの新鋭の大型客船。船室は一等二四名、二等二〇名、三等一一六名であっ

た。

貧乏留学生の海旭は、当然のことながら三等船客であったが、高揚感ではおそらく全乗客中の特等だった。一張羅の紋付袴姿で、甲板に立ち続けて、見送りに来てくれた人々に手をふりつづけた。

と、隣りから「どちらまで行かれるのかな？」と声をかけられた。見送りに応える乗客の中でも異彩を放っている海旭に関心をひかれたからだろう、フロックコートをりゅうと着こなし頭にはシルクハット、手にはステッキの紳士だった。

「はあ、ドイツ国はストラスブルクまで参ります」と海旭は緊張に体を強張らせて答えた。「ストラスブルクか。途中のマルセイユで下船、そこから列車を乗り継いでパリ経由で独仏国境をこえて、優に三ヶ月はかかる。大儀な旅程ですな。ところで、旅の目的は？」と紳士は訝しげに尋ねた。丸坊主頭で袈裟でも着ていれば察しはついたろうが、総髪に紋付

袴の海旭の素性は、紳士ならずとも計りかねた。

「浄土宗海外留学生として、ストラスブルク大学で、比較宗教学を修めるつもりであります」

紳士は驚きを隠さず、「それは大いに結構。宗門も英断をされた。わが日本国の宗教界も内にこもらず広く海外に叡智を求めるべきだ。大いに励みたまえ」

ずいぶんと偉そうな口ぶりに海旭は思わず聞き返した。「あなた様は？」

「これは失礼した。私、林堇と申す。このたび陛下に駐英公使を拝命して、英国はロンドンへ参る」といって、一礼すると去って行った。あれが新聞でも話題になっていた噂の公使様かと海旭はつぶやいた。海旭とのやりとりが伝わったらしく、周囲がざわついた。やれ「公使様と一緒とは光栄だ」やれ「公使様と一緒になら船旅安全間違いなし」などとささやきが起こった。

海旭のドイツ留学は宗門にとっては一大事件であったが、残念ながら、林公使のように世間からは注目されることはなかった。しかし、様々な仏縁で結ばれた多様な人々たちが歓送の宴を催してくれ、その数は一五回にも及び、なかでも宗門主催の送別会では宗務所楼上に百五〇人が集い百円を超える過分な饞別までもらった。さらにはかくも盛大な見送りを受け、海旭は感きわまって涙が止まらなかった。

海旭と林公使のやりとりを聞いていた乗客の一人から声がかかった。「きみは留学生らしいが、船賃が上がって大変だね」。海旭がきよとんとするのになんだ、なにも知らないのか。坊さんは俗世間にうといなあ」

商社の社員というその男によれば、欧州大陸に航路をもつ日本郵船会社外十四の大会社の間に、運賃値上げの協定がととのい、雑貨で一トンあたり五シリングの値上げ、これに人間様の運賃も連動させることが一決し、海

旭らが乗船する五日横浜出帆の讃岐丸より実
行されることになったというのだ。

ちなみに、横浜からの片道の船賃は一等四
五〇円、二等三一〇円、三等二五〇円。これ
にドイツまでの汽車賃が加わる。聞くところ
によると彼の地の下宿代は月三〇マルク（当
時の日本円で一五円相当）。学費も食費もば
かにならない。宗門再興のために、十年は帰
らぬ覚悟でじっくり腰をすえて、研鑽にはげ
んでこいといわれている。いったいいくらか
かるのか。勉学一筋で金にはうとい海旭だっ
たが、頭の中で算盤の玉をはじいた。少なく
とも月の衣食住に二〇円として、一年で二四
〇円、一〇年で二四〇〇円。これに往復の旅
費を加えるとして四、五〇〇円。当時東
京市内で「千円あれば家が建つ」といわれて
いたから、四軒の家持ちになれる計算だ。な
んとも気が遠くなるほどの大金だった。

まさに宗門の命運をかけた一大事業であ
り、海旭は改めて我が身に課せられた負託の

重みをしっかりと受け止めるのだった。

出版社の丁稚から 宗門の海外留学生へ

出帆の銅鑼がなり、讃岐丸はゆつくりと巨
体をゆすらせながら岸壁を離れはじめた。い
よいよ万里の波濤を越えて遙か来江（ライン）
のほとりの古都へと向かうのだ。万感が胸を
ついてこみ上げてくる。

海旭は遠ざかる見送りの朋輩たちに手をふ
りながら、よくぞここまでこられたものだと、
幼少時代からの生い立ちに回想をめぐらせ
た。「いまこうして選ばれて欧州航路の人と
なれたのは、思えば、九歳で寺に預けられた
からかもしれない」と海旭は内心でつぶやい
た。小伝馬町の商家の番頭をしていた父親の
啓蔵が商売にしくじって、海旭は「口減らし」
に出された。辛くはあったが、寺の和尚から
読み書きの手ほどきをうけ、学問と仏の教え
にめざめた。もし父親の商売が順風だったら、

いまの自分はあつたろうかと、海旭は深い仏縁を想った。

学校へ上がる一二歳になると、一家の食いつ持を稼ぐために就学はあきらめざるをえなかった。寺で好学の氣を吹き込まれたからだろう、どうせ丁稚奉公に出るのなら、書物に囲まれて文明の香りをかいでいたい。そんな想いから、本郷にあった書店・博文館の小僧になった。当時できたての博文館はやがて「太陽」という雑誌で当てていまや押しも押されぬ大出版社だ。しかし、文明開化のシンボルのような職場ではあったが、海旭には生まれたてのジャーナリズムに軽佻浮薄けいちうふはくを感じ、子供心にもより深い人生の哲理をきわめたいという欲求の高まりを抑えることができなかった。そんな折に、小石川は初音町の浄土宗の名刹、源覚寺住職、端山海定を紹介する人があり、一四歳で得度した。

源覚寺の境内には、宝暦年間から願をかけると目がおおるとの評判の閻魔像があり、海

旭が寺に入った当時も参詣客でにぎわっていた。「小坊主」の海旭は雑務に追われる毎日だったが、檀家の老婆に乞われると忙中に闇を盗んでは地藏和讃の解説などをした。まさに「門前の小僧の習わぬ講話」だったが、これが住職の知るところとなり、海旭の才覚を惜しんで、開校されたばかりの浄土宗東京支校（芝中・高の前身）へ入学させてくれた。海旭一六歳のときである。あのときの歓喜といったらなかった。海旭は水を得た魚のように、砂漠の砂が水を吸い込むように嬉々として勉学に励んだ。

讃岐丸は霧笛を鳴らすと速度を速めた。故国がみるみる遠ざかっていく。

それにしてもなぜあんなに頑張れたのか。海旭は寝る間を惜しんで勉強した東京支校時代をふりかえって、「しっぺ」事件を思い出し、口元をゆるめた。

同級生の間で勉強の息抜きにと、舶来のトランプ遊びがはやった。負けたりしっぺをく

らう。海旭はけっして強くなかったが、負けても負けてももう一回と食い下がり、いくらしつべをくらっても平然としているので、勉学仲間をいささか辟易とさせた。そうそう、ある先輩からこんな言われ方をされたものだった。「渡辺のやつは、丁稚で車を引いてたもんだから、手の甲が厚くって、さっぱりしつぺが堪えない、堪えないどころかこつちが痛くなるから割に合わない」

生徒のほとんどは浄土宗の大きなお寺さんの子弟で、海旭とは氏も育ちも違っていた。箸より重いものを持ったことがないようなお坊ちゃんばかりで、手のひらもふくらとしていた。そんな氏と育ちの違いが、海旭に負けん気を生み、それが勉学のバネにもなったのだろう。艱難辛苦かんなんしんく汝を玉にす。今になると、幼少時の苦勞も仏のお導きと感謝するばかりだ。

東京支校に入ってから、とんとん拍子だった。周囲からは刻苦勉励の虫のようにみら

れたが、当の海旭は「苦」などなく楽しくてしかたがなかった。明治二三年、浄土宗東京支校からその上の浄土宗学本校に進むと、高等予科、同本科を優秀な成績で卒業。予科では宗余乗学、哲学、国語、漢文、英語、ラテン、数学、地理、歴史、博物、理財学など、本科では俱舎、唯識、華嚴、天台の教学を修めた。本科卒業式では学生総代として答辞を読み、管長賞を受賞。ただちに、関東各県下の浄土宗学院連合第一教校教諭に任命され、宗門機関誌の「浄土教報」の主筆として健筆をふるうかたわら、浄土宗内地留学生に任命され、比較宗教学を専攻——。気がつく、宗門の興望を担う栄えある第一回海外留学生に選ばれていたというのがいつわらざる気持だった。

走馬灯のような長い回想からさめると、本土は水平線のかたに消えていた。海旭は、目を細めて増上寺のあるはるか東の方角へ向けて合掌した。

「生涯妻帯せず」を 饒別の返礼に

かつて鑑真和尚を何度となく難破させ、呂宋助左衛門ら冒険商人を遭難させた東亜の海は荒れることもなく、船旅はまさに順風満帆だった。海旭には、天が海旭の門出をことほいでいるかのように思えて、留学日誌の初日冒頭に次のように記した。

「出帆の日は皐月の五日にして水天宮の賽日。船の名は讃岐丸にして海上守護の神たる金毘羅に縁あり、航海の前途は万々歳と水夫の歌を聞くも亦これ乗船客の一興事たり」

横浜から纜を解いた讃岐丸は香港、シンガポールを経由して六月一日、セイロンの首都・コロンボに到着。給油給水や食料補給などのために数日、碇を下ろした。

ようよう船旅暮らしにもなれてきた海旭は、南伝小乗仏教の聖地で、仏教改革運動の同志たちへ第一信を認めようとして、微身が

負った宗門を超えた使命感をかみしめた。

徳川幕藩体制二六〇年、すべての「民草」は寺の檀家に登録を義務付けられることで管理されてきた。つまり海旭の浄土宗をはじめ既成仏教は「戸籍係」として幕府の重要な行政下請け機関を担ったのであり、維新政府が既成仏教を目の敵にしたのは当然の成り行きであった。その国家プロジェクトが廃仏毀釈と国家神道制であり、それによって既成仏教は衰退を余儀なくされた。これに危機感をいだいた若き仏教徒たちによる宗派を超えた革新運動が新仏教同志会であり、仕掛人の一人が渡辺海旭であった。

「旧仏教は死ぬための仏教、新仏教は生きるための仏教」と高らかに謳った新仏教同志会は前年にできたばかりで、独り立ちは覚束ない。既成宗教界はもちろん国からも圧力をうけるかもしれない。海旭は後ろ髪を引かれる思いで、出立にあたって会に一〇円を寄付。そのとき、同志の高島米峰とこんなやりとり

をしたものだった。

「遠い異国へ出かけるにあたっては、一円だつて多くもつていきたいだろう。我々同志たちにはろくに餞別もわたせず忸怩たる思いがあるのに、逆に寄付をもらうわけにはかない」と固辞する米峰に対して、海旭はこう応じた。「いやいや僕は生涯結婚しないから、生活は簡単にいく、そのぶん研究に金をつぎこめるし心配は無用。それより、一緒に起した運動の方が心配だ。ともかく十円をおいていくから、これで運動をしつかりやつてくれ、僕も寄稿をしたり、論文をよせたりして応援を惜しまないから」と。

このとき米峰は方便と取ったかもしれないが、「嫁は生涯もらわぬ」は海旭の断固たる決意だった。海旭は「生涯不犯」をつらぬくが、それには旧仏教が「妻帯勝手の策謀」のワナにはまって墮落させられたという悔悟があったからだ。明治五年、「僧侶の肉食、蓄髪、妻帯勝手たるべし」の太政官令が發布され、

僧侶が妻帯に走って庶民から信頼を失い、これが廃仏毀釈と共に「旧仏教」の衰退を招いたからだった。

ただし、海旭にとって妻帯は否だが肉食は大いに結構だった。船旅の楽しみはたらふく肉が食えることであり、「食」の面ではドイツ留学は大いに楽しみだった。野菜はごめんこうむって果物にも手をつけないという海旭の徹底した肉食礼賛は生涯直らず、これが寿命を縮めた一因という弟子たちもいるが、ここに海旭の単なる復古主義でない革新性があった。

折しも日清戦争に勝利し、三等国民といわれていた日本は二等国から一等国をめざそうと、殖産興業、富国強兵へ国と民をあげて邁進しつつあった。しかし、海旭には、国が富み強くなっても心はどうかという懷疑があった。物は真似ても心は真似てはならない、いや真似などできぬ。ヨーロッパの近代に憧れるあまり、すべてを丸呑みしてはならぬ。産

業や軍隊や政治経済の制度などの「物」は真似てもよからうが、宗教はそうはいかぬ。工学や実学とはわけがちがう。向こうにいけば新しい時代の心のあり方のお手本が用意されているとも思えなかった。

では、なぜ仏教徒がヨーロッパをめざすのか。それは、日本の宗教界、とりわけ日本人の伝統精神を形づくってきた仏教が混乱と衰微の只中にあるときだからこそ、原点に帰らねばならない。しかし原点である經典はもはやインドにも中国にもない。大航海時代以降

西域などで經典の発掘があいつぎ、ヨーロッパへもたらされた。めざすは仏教の原点たる經典である。それにあいまみえることが海旭の使命である。

海旭と海旭の覚悟を乗せた讃岐丸は、セイロンを発し、インド洋上を、近代文明の地をめざした。波濤を切り裂く船首の甲板に立ち、頬に風をうけながら、遠く西の方をのぞんで、まだ見ぬ万巻の經典を想った。気分は、千年以上もの前にシルクロードを伝って遠く天竺に經典を求めた玄奘三蔵であった。(つづく)

古き伝統技

三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-1289

振替0018012145231

連 載

会いたい人 関 容子

柳家小満ん

さん

①

撮影／タカオカ邦彦

三十何年か前、上野本物亭で小満んという若手噺家が、独演会の高座に『日本の鶯』をかける、と聞いてびっくりした。この題名は私の著書と同じ。詩人堀口大學の聞書きを、どうやって落語にするのだろう、と不思議に思い、知らせてくれた落語好きの編集者に確かめた。すると、彼には若くして文人墨客の風情があり、以前は名人桂文楽（八代目）の弟子で、当時の芸名の小勇は歌人吉井勇に由来する、とのこと。それなら本牧亭で大學先生のお噂が聞けることに間違いないと喜び、私は花束を持って勇んで小満ん師匠を聞きに行った。

その『日本の鶯』とは……。堀口大學さんが故郷長岡へ帰る夜汽車の中で読んだ吉井勇の短歌に釘づけになり、その縁をたどって与謝野鉄寛・晶子夫妻の新詩社に入門する。同じころ、紀州和歌山から上京してきた佐藤春夫も新詩社に入門。二人は偶然同い年だったことから、「仲よくなさいね」と晶子先生に

引きあわされる。そしてその二人が、「まずは一高を受験しますが、いつ、こうに受かりません」というあたりで、やっと落語らしくなった。やがて推せん入学で二人は慶応へ。入ってみると、文学部の学生は三人だけで、顔を合わせれば三田から銀座、日本橋へと繰り出して、「腹が減るとドーナツなんかをかじりまして、末はどうなつことやら」といった感じ。ところどころに大學詩を引いてきて助教授の講義のように鑑賞する。

客席はみんなこの文学青年噺家に好意を持っていらしく、誰一人つまらなさそうな様子はなかった。

それ以来、小満んさんとはずっと親しくしているのか、かえってきちんと話を聞く折がなかったが、今回改めてなぜ『日本の鶯』だったのか、と伺ってみた。

「あの本のことは、音楽会で会った人から回り回って知ったんですね。大學さんの詩はあかぬけて、エロチックで、随所に言葉の

おしやれがあつて好きなんです。日本のほかの詩人はみんな暗くて、ついて行けません。その点、大學さんは外国暮らしが長くて、年上の画家のマリー・ローランサンに可愛がられて、わざと寂しい歌を歌う日本の鶯ちゃん、と言われたつてわけでしょう。つまり、ツバメちゃん、つてわけですよ。明治の男が西洋で、よくやつてくれた、つてものですよね」

小満さんは昭和十七年、横浜に生まれた。「と言つても横浜の南のはずれ、六浦町むつらといつて、ひと山越えれば逗子、鎌倉。東側には金沢八景の内海がある、というところですよ。親父は米屋から酒屋になつて、戦後はリングの業者とかいろんなことやりましたけど何をやつてもダメで、家は貧しかったですね。七人きょうだいでしたけど、長兄が亡くなり、姉たちが次々にジフテリアで亡くなつたあとにわたしが生まれたので大事にされて育ちました」

落語との出会いは、当時毎日のようにラジオから流れてくる落語放送だった。

「それで親父にねだつて、一べん寄席へ連れてつてもらつたんです。上野の鈴木演芸場でした。そのときわたしは生まれて初めて、坊ちゃんと言われたんですよ。案内のお茶子さんに。坊ちゃんどうぞこちらへ、つて言われて、戸惑つてまわりを見まわしたりしましたよ（笑）。噺家が酒を飲む仕草をするときに、本当にそこに盃を持つてる、つて首を伸ばしてのぞきこんだ覚えがあります。無邪気なものでした。歸つて父親が、落語は罪がなくていいや、つて母親に話してましたけどね、のちにわたしが噺家になつちやつたわけですから、やつぱりあれは罪だったのかもしれない」

小満さんの高校時代はラジオの落語番組全盛期で、文楽、志ん生、円生、小さん、金馬、三木助、可楽と、連日の名人芸に耳を傾けていた。高校を出て、東京・国分寺市にあ

る東京農工大学の繊維工学部へ入学。通学途中で神田の古書店へ立ち寄って、『あばらかべつそん』（正岡容による桂文楽芸談聞書き）と『落語鑑賞』（安藤鶴夫著）の二冊を偶然手に入れる。これが二冊とも文楽に關した本で（後者は安藤が好きな落語十席を選んで鑑賞するもので、その九席までが文楽のネタ）、これが小満んさんと落語界との運命的な出会いとなるのもいかにも文学青年らしい。

「横浜駅西口に相鉄演芸場というのがあって、学校の帰りにちよくちよく通つてました。すると次の席の予告に『主任 落語界の至宝桂文楽』とあつたんです。それまでに文楽師匠の高座は三越落語会で見ているんですけど、今度は二冊読んだあとですから興奮しました。いつもは学割を使って自由席なんです。が、このときは奮発して白力バーのかかった指定席、それも高座への出の見やすい席を求めましてね。固唾を飲んで待つていると、その前に出る誰もが、文楽師匠のことを何かと

口にして、楽屋内でみんなの尊敬を集めているのがよくわかりました。いよいよ師匠の出囃子。いつもラジオで聞き馴れた派手な『野崎』の『はずが、ちよつと重々しい』『中の舞』で、あれ？ と思つたんですが、寄席でトリをつとめる場合はいつもの決まったのではなくて『中の舞』を使うんだとあとで知りました」

小満んさんはこのとき文楽師匠に「ひと目惚れ」して、熱に浮かされたようになり、弟子入りを決意してしまふ。のちにその著書『べけんや わが師、桂文楽』の中でこう書いています。

「それにしても、何と品があつて、美しくて、神々しいんだろう……と、まったくどの噺家とも別ものの姿形にうつとりと見ほれてしまった。黒紋付の着物に袴で、両手で白いハンカチと扇子を重ねるようにして持ち、それを袴へ当てるようにして、いかにも低姿勢な形で、静々と現れ、一瞬うしろから鈴をつけた

座敷犬でもついてくるような雰囲気……」

文庫版の「解説」で、長部日出雄氏はこの文章を絶賛し、当時六十七歳の文楽を見て「世の中にはこんなにもすてきなお年寄りがいたのかという思いで、心がとろけて」しまう小満んさんだが、やはり落語家だけに「座敷犬」という諸諺をつけ加え、これには吹き出さずにはいられない、としている。

まさにこの『べけんや』は、内弟子としてずっと身近にいた者にしかわからない文楽師匠の素顔、暮しぶり、人柄などが、あたたかでいて深い観察眼で描き出された名著と言える。

相鉄演芸場に十日間通いつめた小満んさんは、その翌日か翌々日、上野西黒門町（にしぐろもんちやう）の師匠の家を訪ねている。

「師匠は客席を見ませんけれども回りが気づいて、またあの学生来てますよ、ぐらいは言ってたかもしれません。最初の日はおかみさ

るだけに会えて、後日の約束の日に向うと、師匠はなんとなく御機嫌な様子で、では吉川英治先生の『太閤記』を読み直してくること、保証金として二万円を自分で稼いで持つてくることを命じられました。そのころみんなの割り（寄席の日給）を持ち逃げした前座がいたそうで、落語協会会長の師匠が保証金制度を取り決めたばかりだったらしいんです。それで、家庭教師と、塾の先生と、ペンキ塗りのアルバイトをしてようやく二万円をこしらえて、今度は父親と一緒に正式に弟子入りの挨拶に伺ったんですが、では明日からおいでと言われてみると、急に怖くなったんですかね。大学へ戻ろうかしら、とか心がゆらいできて、やれ風邪をひきましたとか、やれ肺炎になりましたとかと手紙を出して迷っていたら、御都合が悪いようならお預りしたお金はお返し致します、という丁寧な字の葉書が届いたんです。それでハッと我に返って、かあちゃん、じゃあ、と言って家を出たわけです」

桂文楽師匠にもらった小勇の名であがった高座。勇は吉井勇から師匠がとったもの。



小満さんは通いのつもりでいたが、気がついたら内弟子になっていた。なかなか芸名がつかず、師匠も兄弟子も「横浜の」と呼び、おかみさんに至っては「おい、小僧」だった。「一週間くらい名なしでしたけど、ある日、小さなメモ用紙に鉛筆で『桂小勇』と書いたのを渡されて、吉井勇先生のお名前をいただいてあげるんだからそのつもりでしっかりおやり、と言われたんです。吉井先生は亡くなったばかりで、師匠は親しいおつきあいだったのでとても寂しい思いをしてたんでしょうね。京都のお宅へ電話をかけて奥様にお断りして、只今当人を出します、と言われてわたしも御挨拶しました。と言っても当時は何のことやら事情がさっぱり飲みこめずにいたんですけどね」

吉井勇と文楽の親交を示す短歌二首がある。

落語家^{はなしか}の文楽のことふと思ひ

笑ましくなりてわれは寝むとす^{いねむ}

長生きも芸のうちぞと落語家の

文楽に言ひしはいつの春にや

「師匠はよく『長生きも芸のうち』と口にしていましたが、これは吉井先生から授かった言葉だったんですね。座右の銘のように思っていたんだと思います。吉井先生の形見の長襦袢は、その後十年間は師匠が好んで着ておられましたけど、それが師匠の形見として今わたしの手元にあつて、じつに有難いことだと思つています。長襦袢は、薄茶のあられ小紋、羽二重の袷ですが、洗い張りをして、反物に綴じたままにしてあります。仕立てても師匠は小柄でしたからタケが足りないと思いますので」

ところで、吉井勇は明治十九年生まれで、文楽より六歳年上になる。すると文楽は明治二十五年生まれだから、小満さんがその詩に魅了された堀口大學も佐藤春夫も同い年になる。これも不思議な御縁。

さらに小満さんは『べけんや』の文庫版あとがきに興味深い発見を記している。

樋口一葉は明治十七年、十二歳のときに一家が「下谷区上野西黒門町二十二に転居」している。それを一葉の年譜で知った小満さんが慌てて黒門町に入門当時の克明な地図を広げてみると、西黒門町二十二は奇しくも師匠宅を含めた路地一面の番地だった。

「師匠はよく身近な人の顔を見ると、何か珍談はないかい？ って訊ねるんですが、この話なんか持つてつたら、へえー、五千円札の一葉さんかい。うちが後釜だったとはねえ、べけんやだねえ、と面白がつてくださったと思ふんですね、お墓に報告してきました」

それにしても、現在は文人墨客そのものになつてきた小満さんにふさわしい因縁話がよく揃うものだ。

(つづく)

若し勤めて精進すれば、則ち事として難き者なし。

是の故に汝等当に勤めて精進すべし。

譬えば少水の常に流るれば則ち能く石を穿つが如し。

（『仏垂般涅槃略説教誡經』）

怠らず努力を重ねれば、成し得ないことはない。

だから、汝ら弟子よ、懸命に精進せよ。

わずかな流れの水も、やがては石に穴をあけるように（結果は必ず顯れる）。

努力と結果と

「日本一の下克上」「球史に残る下克上」「下克上完結」……。

十一月八日付各紙朝刊のスポーツ欄は、申し合わせたように大きな「下克上」の文字がスペースを陣取っていた。プロ野球日本シリーズの話だ。

日本のプロ野球は現在、セントラルリーグ（セ・リーグ）とパシフィックリーグ（パ・リーグ）に分かれており、それぞれに属する六球団が各百四十四試合を戦い、各リーグにおけるその年の順位を決めている。かつてはリーグ優勝したチーム同士が戦って日本一を決めていたが（日本シリーズ）、平成十九年から、その前段にクライマックスシリーズというあらたなハードル（見方によつてはチャンス）が設けられた（パ・リーグではすでにその三年前から同様の制度が導入されていた）。

これは、各リーグ三位のチームがまず二位と三試合制で戦い、二勝した方が一位チームと五試合制（一位にははじめから一勝を付与）で戦い、勝った方が日本シリーズの出場権を得るというもの。つまり敗者復活戦であり、リーグ優勝をしてもまだ日本一を争う権利はないということだ。当然、リーグ内で二位、三位でしかなかったチームに日本一の座を^{すく}奪われる大ハブニングも生じ得る。

今年の日本シリーズはまさにそれが現実となった。パ・リーグの覇者はその

悪夢を現実のものとして突き付けられた。

筆者は、かつて故郷の球場を本拠地としていた今年の日本一チームの、子供の頃からの最^{ひい}親である。故郷を離れて二十年にもなるのに、しかもこの間、そのチームは二回も本拠地を移っているのに、今だに“オラが町のチーム”という意識が強い。友達がとってくれたチケットで日本シリーズ第三戦を観ることもできた。クライマックスシリーズ、日本シリーズを通して、どの試合も最後まで諦めず何度も逆転劇を見せてくれた戦いぶりには感動もしたし、勇気ももらった。しかも日本一。ファンにとっては「言うことナシ！」のはずだ。

しかし、実際に日本一になると今ひとつしっくりこない。

実はこのあたりのことは、そのチームがクライマックスシリーズを勝ち上がって日本シリーズ出場権を得たとき、すでに論議が始まっていた。「三位チームが日本一になる可能性があつていいのか」と疑義を呈する新聞、反対に「決められたルールに則っているのだから正々堂々と日本シリーズを闘えばいい」と後押しする新聞と、意見は二分。当初は後者寄りだった筆者、同じくファンの友達に、モヤモヤした心境を打ち明けてみた。

「クライマックスシリーズは完璧なシステムとは思わないが、人気下降気味の

プロ野球を何とか盛り返そうという中での妙策でもあり、仕方がない。気にする必要はない」と肩を叩かれた。「勝負の世界はキビシイもの」、「在学中どんなに優秀な成績でも、希望校にうかるかどうかは別問題、それと同じようなものじゃないの」と言う人もいた。どの意見もごもっとも、よくわかる。わかるのだが……。三位チームとの短期決戦に敗れた瞬間のリーグ優勝チーム選手たち、テレビに映った彼らの茫然自失の表情が臉に焼き付いて離れない。

本来なら、長丁場を勝ち抜いた末のリーグ優勝というタイトルはもっと輝いていいはずだ。が、結果的にそれも霞んだかたちになってしまった。権威が損なわれはしないだろうか、レギュラーシーズンへのファンの熱意は冷めないだろうか、という懸念、積み上げた努力はしかるべく報われてほしいという、素朴な願い……。もっとも、リーグ二位、三位に甘んじたチームにも救済の手が差し延べられるという、大乘仏教的と言えなくもないシステムではあるが……。

しかしそれとて、観客動員や経済効果を狙った制度でもあり……。もう何十年前も前、社会の教科書で習った「下克上」の意味を調べてみた。「下位の者が上位の者を押しのけて威勢をふるう意」（角川出版『日本史辞典』）押しのけて、か……。うーむ、複雑……。考え過ぎかなあ。

（小村正孝）

第三十七回

江戸を歩く



深川木場に向かつて歩く

大江戸ウォーカー
森 清鑑

の余材が使われたという。雪旦はこの大橋を日本橋川から北東方向に描いている。

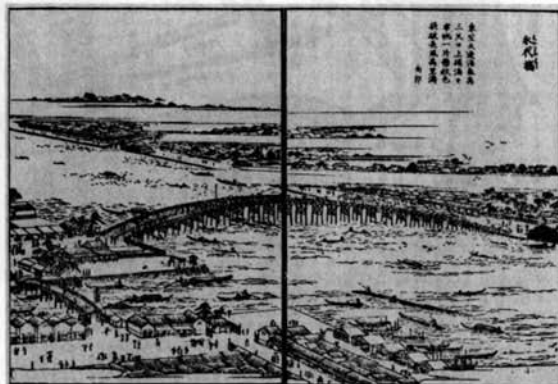
高尾稲荷

船手番所の北側に隣接して高尾稲荷がある。大川の水に洗われる岸辺にお堂が建っている（明治になって西側に移転）。この高尾稲荷は単なる稲荷様ではない。なにしろ吉原は三浦屋の当代最高の花魁、二代目高尾太夫の頭骨が納められているという。現代でもその由来を見ると、「万治二年（一六五九）、仙台藩主伊達綱宗侯の寵愛を受け、大金を積んで身請けされたが、すでに高尾には意中の人があり、候に従わなかったため、この辺りの船上で吊し切りにされ遺体は大川に捨てられた。ややあって遺体は北新堀河岸に漂着。居合わせた僧が手厚く葬ったことに始まる」とある。二代目高尾太夫といえば、艶名鳴り響き、和歌、俳諧、書、諸芸に通じ、彼女の句「君は今駒形あたりほととぎす」や辞世の句

「寒風にもろくも朽つる紅葉かな」はあまりにも著名である。その墓は浅草北の春慶寺にもあり、仙台にもある。真義のほどは不明だが江戸っ子は、この小さな稲荷を高尾太夫稲荷として大いに信仰し、参詣人も絶え間なかった。永代橋登り口の左下方を見ると、頭にまつわる悩み事を解消祈願する江戸町民の姿がある。

永代橋風景

さて、永代橋を登り、眼下に滔々と流れる大川を眺めながら深川へと渡ることにしよう。「西に富士、北に筑波、東に上総、南に箱根」。そこには多くの画家の題材となった絶景がある。北遠くに筑波山が霞み、江戸湾の方にふり返れば堂々たる富士の山。絶景で



◆雪旦江戸名所図会「永代橋」
絵の左下に日本橋川・豊海橋。
渡ると船番所。橋の渡り口左
に高尾稲荷。橋を渡ると絵の
右側が深川佐賀町。左上に筑
波山が見える。

ある。美しい佃島、江戸湊に大きな廻船が何艘も浮かんでいる。広重の絵は、橋を渡る人々がこの美しい光景に見とれている姿を描いている。江戸名所図会に曰く。「東南は蒼海にして、房総の翠巒斜めに開け、芙蓉の白峰（富士山）は、大城（江戸城）の西に峙ち、筑波の遠嶺は墨水に臨んで朦朧たり。風光さながら画中にあるがごとし」。江戸の人々は絵に橋と帆柱が描かれれば、それは永代橋のことと連想するほどであった。

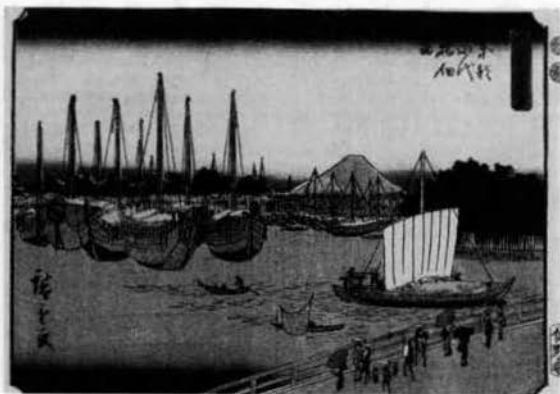
赤穂浪士休息地

永代橋を渡りきると、そこは深川佐賀町である。佐賀町は大川沿いに北の仙台堀まで縦長に続く（佐賀町一、二丁目）。深川江戸資料館に再現されている江戸の家並みは油堀、下之橋に接する佐賀町原風景という。深川でも最も繁華な町人の町。永代橋東詰左を見ると立ち並ぶ家並みの中でも一際目立つ乳熊屋作兵衛商店（ちくま味噌、宮内庁御用達）

がある。元禄元年（一六八八）、伊勢乳熊郷出身の竹口作兵衛が創業した味噌屋で歌舞伎にも「味噌はちくまにかぎるのう」というセリフがあるほど江戸で有名な店。彼は芭蕉の高弟、宝井其角に師事していた俳諧の人でもあった。同じ仲間

に赤穂浪士の大高源吾があり、親しくしていた関係もあって、討ち入りの報を聞くや、快哉を叫び、一行の到来を待ちわびていたという。

赤穂浪士一行は本懐を遂げた後、幕府直轄の両国橋は渡らずに右に大川を見ながら堅川一ツ目の橋を渡り、御船蔵、御粉蔵の脇を通って小名木川万年橋、霊運院、深川清澄町を経て、仙台堀上之橋を越え深川佐賀町に入り、



油堀下之橋を渡つて来た。一行を待ち構えていたのが竹口作兵衛で店に招き入れると甘酒粥を振る舞う。大高の姿を見つけると涙ながらに歓待。内蔵助以下の面々もほっと息継ぎをする。しばし歓談ののち、大高源吾は御礼にと棟木に「味噌四海遍し」と記し、次いで看板も書き残す。後日、このことが江戸名所の一つになる。現代も「赤穂義士休息の地」と石に刻まれている。休息した一行は永代橋を渡り、御船手番所を右に日本橋川豊海橋を渡り新堀町、靈巖島を経て赤穂藩邸があった鉄炮洲に立ち寄り、泉岳寺へと赴くのである。

富岡八幡へ

永代橋東詰から大川沿いに南に下ると、佐賀町に続いて深川相川町の家並み。相川町の角を左へ曲がり、大川から東へと進む。右手に正源寺の参道を見て少し歩を進めると油堀西横川に架かる福島橋。この橋を渡ると次が八幡橋。黒江町の家並みを割ってさらに行く

と富岡八幡の、一の鳥居がでんと立っている。今はないが江戸期この大鳥居を潜れば富岡八幡の参道なのである。そして鳥居の近くに晩年の紀伊国屋文左衛門の住まいがあった。道の左右は永代寺門前仲町。深川でももつとも繁華な町並みが展開する。江戸城から見ても己の方角なので辰巳芸者と呼ばれた、気っ風の良い姉さん芸妓が活躍し、江戸っ子がこぞって遊びに行つた花街でもある。そこには料理屋、三味の稽古屋が集結。この馬場道をちよつと行くと左側に二の鳥居がある。これを潜って参道を行けば富岡八幡宮である（現代も同じ）。社地は八幡宮から西へと広大に広がり、八幡宮別当の永代寺境内となる。神仏混合の典型的な形で六万五千坪に及ぶ大敷地の周囲は、北の十五間川から引かれた堀がぐるりと囲んでいる。この南には大島川が滔々と流れ、大川に注いでいる。

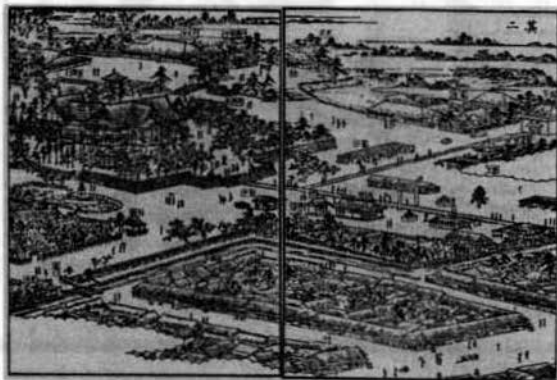
江戸名所図会に描かれている富岡八幡、永代寺の美しさと云つたらない。富岡八幡の二

の鳥居から表門を潜り、堀を渡ると細長い参道が続き、再び鳥居がある。周囲は広場。茶屋やお堂が点在している。そして城壁のような低い石垣に囲まれた一画の上に八幡宮の本社がでんと控えている。この本社郭の後方に、二軒茶屋、江戸の高級料亭「伊勢や」と「松本」がある。余程の高級料亭だったらしく「二軒茶屋肝をつぶして払いをし」などと云う川柳が残されている。

本社の西側の石垣を左に曲がると広い永代寺の庭園に入る。松の木が乱立し、そこかしこに池、小高い丘があり、絶景である。永代寺散策は江戸の名物。花見の季節には解放され、江戸っ子がこぞって遊びに来る。美しい景色の中をさらに西へ歩くと永代寺の社がある。名所図会の後方には十五間川が滔々と流れ、船が行き交っている。この永代寺は明治の愚挙、廃仏毀釈によってつぶされ、八幡宮に吸収され、永代寺地蔵堂を残すのみとなった。もともと八幡宮の別当なので、大きな混

乱はなかったが、江戸の人々にとっては寂しいことになり、広大な庭園は深川公園となり、成田山不動堂が建立された。

富岡八幡を囲む堀を東に渡ると、通し矢で有名な十三間堂がある。そのちよつと東寄りには広い三十間川が南北に流れている。これまで歩いてきた道の東西に、大川と三十間川が縦に流れ、南北に油堀・十五間川と大島川が横に流れており、これらの川に挟まれた地域は、江戸初期には永代島と呼ばれた島であった。永代寺や永代橋の名の起りである。そのようなわけで江戸期、此処には縦横無尽に堀割が巡らされていた。



◆江戸名所図会
富岡八幡宮～永代寺。

シリーズV

法然上人を
めぐる人々

勢観房源智

◆第七回◆

の入室

石丸晶子

四

「……」

涙を静かにながしながら、しかし黙っている智丸をみて祐清は、

「そなたの父については、今、母が言ったとおりだ。母もこの祖父も、源氏の目からそなたを隠してここまで育てるのにいかに苦勞したかしのね。われらとて手放すのは身を切られるように辛い。しかし、これ以上ここにいるのは危険なのだ。つい先ごろも洛内で平家残党の薩摩殿父子が捕らえられ処刑されたことは知つていよう。分かつてくれ。そなたを生かすためののだ」

「……」

やがて涙を拭いながら智丸はいった。

「法然上人のもとへは何時まいるのでござい
ますか」

「法然上人のもとへは、ここ数日中にも母が
そなたを伴つて参上しようぞ」

官司はそういうときびしい口調で、

「そなたは今、母が申したように平家嫡流の者なのだ。これが人の知るところとなれば、そなたの命はもとより、源氏の氏寺であるこの石清水八幡で長年そなたを育ててきた母も打ち首はまぬがれぬ。官司のわれらとて同じことだ」

祐清はことばを切つた。

「さすれば、法然上人のもとに行つた後、いかなることがあろうと、決してわが身のことを人に話すでないぞ。話したとき、そなたはもとより、そなたの母も紀一族の命もないと思わねばならぬ。出家後も、平家一門の菩提を祈りつつ、静かに片隅で、決して人目につかぬよう生きていくほか、そなたの道はないのだ」

官司は深い溜め息をついた。

「お祖父様、そして母上」

智丸は官司と母をみつめた。

「法然上人が徳高いお方であられますことは、

都からのうわさでわたくしも承っております。法然上人様のもとへまいりますからには、わたくしも修行に励み、決してお祖父様や母上に、ご心配をかけるようなことはいたしませぬ」

「よう言うた。その心をわすれまいぞ」

祐清はいった。

「法然様にそなたをお預けしたいと思ったのは」

美子よしこが涙を袖でおさえながら祐清のことをひきとって、

「そなたのおじいさまである内大臣様（平重盛）は山を降りられた法然上人様に早くから帰依しておられたのです。今、吉水で法然上人様の許におられる法蓮房様（信空）が平家御一門とはゆかりのあるお方でね。小松のお邸では何度法然様の講筵がひらかれたかしれませぬ」

すぎさった日のなつかしい思い出が美子の胸をひたしていった。

五

みんな若く、法然上人もお若く、平家一門は全盛の日々であった。

「法然上人に深く帰依された内大臣様は、広いお屋敷に四十八間の聖舎をお建てにまでなされたのですよ。人びとは内大臣様のことを燈籠大臣と呼びしてね」

思い出をたぐりながら美子はすすり泣いた。

法然上人とその浄土の教えに深く帰依した重盛は、その屋敷内に阿弥陀の四十八願にならって四十八間の聖舎を建て、その一間ごとに一つずつ計四十八の燈籠をかけさせた。

そして毎月十四日と十五日には一間に六人ずつ、四十八間あわせて二百八十八人の色白く眉目うるわしい女を尼衆とさだめ、さらに広く平家や他家の人びとをも請じて、大念仏会をおこなったのである。

重盛自身もその行列に加わって、念仏を称



えた。

揺らめく灯火のもと、人びとが音声高い
つせいに念仏を称えるさまは、現世における
浄土の情景さながらであった……

「そなたが生まれてまもなくでした」

開け放った広い座敷の前にひろがる庭木の
繁みから、夏も終りに近い蟬の声が聞こえて
くる。

美子はつづけて、

「西海に落ちていかれた師盛さまやご一門の
方々のご消息のひとつでも聞けたらと、内大
臣様ご一家がお住まいであった小松谷のお屋
敷をたずねたのです。しかしあたり一帯はす
でに焼け野の原でお屋敷のおもかげさえあり
ません。母は悲しみのあまりその足で吉水に
向かい、法然上人をおたずねしました」

美子の眼前に、そのときのことどもがあり
ありとうかびあがつてきた。

それから今日にいたるまでの十三年とい
う、美子にとって長い月日を、彼女は法然上
人のみ姿とおことばに支えられて生きてきた
のであった。

「出家させねばそなたの命がないと知りつ
つ、今日まで過ごした歳月、いつも母のここ
ろに浮かんでいたのは法然上人のみ姿です
た。十三年の昔、お目にかかった法然上人の
み姿に支えられて母は生きてきたのです」

建久六年（1195）秋七月をむかえて間もなく、日の出前に石清水八幡の宮司屋形を美子とともに出立した智丸は、その日の朝には吉水の草庵で法然上人と向かい合っていた。「大きうなられた」

目の前に緊張して坐っている智丸には、曾祖父重盛の、祖父維盛の、そして平家一門の人びとに共通する、どこか果がなく、優しい面影がやどっている。

「大きうなられた」感慨深く法然上人はもう一度つぶやかれた。

やがて美子に向かつて、

「智丸殿の御身、たしかにお引き受けいたしました」

といわれると、智丸に向かい、

「これから以後、そなたは俗縁を離れ、出家の身となれるのです。阿弥陀仏のご誓願により頼み、ただ信仰に生きられよ」とさとされた。



六

かくして智丸は法然上人の御弟子となり、仏弟子としての新しい生涯に生きることになった。

と、智丸の弟子入りから何日もしない同じ建久六年七月、過ぎさった二年間を法然上人のもとで浄土の教えを学んでいた直実が、鎌倉に帰着した頼朝の後を追うようにして東国

に旅立っていった。

久々に故郷の熊谷郷のようすを見たいこととともに、頼朝に目通りして直接話したいことが東国下向の理由だという。

「薩摩宗資父子という平家の大物が先ごろも都にかくれひそんでおったとは。幕府は何をしておるのか」しきりにそうつぶやきながら、彼は東国へ向かっていった。

と、八月も終りに近づいた或る日、法然上人のもとへ、その直実のことが伝わってきたのである。

それによると、鎌倉で頼朝の前に出た彼は、穢土を厭いひたすら浄土を欣求すべきことを説くとともに、戦にあたって如何に作戦をねり、戦うべきか、自分が思うところを滔々と弁じたという。彼は

「出家の身でかく兵法のことを鎌倉殿に言上するというのは、他でもありません。われらの目には幕府の威光、今一点においていまだ定まらぬところがあるやに見えるからでござ

います」

といい、さらに

「その一つに、平家が滅んですでに十年。しかるにいまだ平家の残党は後を絶ちませぬ。これを絶やさずして磐石の上に幕府があると言えましょうや。われらが深く憂慮するところであります」

といって、

「この直実、出家の身なれども、元はいえは鎌倉殿の侍。幕府と源氏の行く末を思う気持ちは御家人時代といささかも変わるものではありません」

と言い放った。

この直実の言上をきいた頼朝はじめ居並ぶ幕府の面々は、

「さすがは直実。出家したりともその御家人魂はいささかも衰えてはおらぬ」

と感嘆したという。

このことを伝え聞いた法然上人は憂慮された。いかにも直実らしい言行であった。

いずれ直実は吉水に戻ってくるであろう。法然上人は智丸と直実が始終顔をあわせることになるのを憂慮されたのである。そのとき、思わぬどんな事態が出来（出来）るかわからなかった。

否、直実のことだけではなく、吉水の草庵には都の内外からさまざまな人々が浄土の教えをきくためにおとずれている。僧侶もいれば貴族も町びともいた。幕府の武士が往來の途上に立ちよることも多かった。

平家残党が今なお発見されて処刑されている現在、人びとの出入りが多い吉水にいては、この先、不測のどんな事態がおこるかかわからないのだ。

（智丸を私の許に置くよりも、天台座主慈円僧正の許に預けたほうが、智丸の身の安全が保たれよう）

法然上人は決心された。

吉水の草庵が雑多な人びとがやってくるところであるのに対し、住持が天台座主である

格式高い青蓮院は、めったな人間が中に入れぬ聖域であった。

摂関家に生まれた慈円はその二年前に天台座主となり、日ごろは青蓮院に住していたが、彼は仏教界の最高権力者であるとともに、加えて幕府方摂政関白として京都政界を取り仕切っている兼実（月輪殿）が、慈円の同母の兄なのである。

そしてその兼実とはいえば、法然上人に帰依して六年あまりが経っている。

（月輪殿を通して智丸を青蓮院に預けよう）。

法然上人はお心をお決めになると、万一を危惧して手紙などではなく、ご自身で直接青蓮院に慈円を訪ね、智丸のことをお頼みになった。

智丸が慈円の弟子として青蓮院に引き取られていったのは、その日から間もなくであった。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●小鳥

〔特選〕

母と居て小暗い家や小鳥来る

間村 俊一

「小暗い」は「小暗き」とするところだろう。
この小暗さから茅葺き屋根のどっしりした家
で、囲炉裏に自在鉤という状景が浮かんでく
る。火は赤々と燃えている。二人の座る位置
も決まっているのである。

〔佳作〕

小鳥去り釣瓶落としの墓地となる

佐藤 雅子

小鳥来る朝の明るき荷船ゆく

増田 信子

木の実にも好みありけり小鳥来る

石原 新

●葡萄

〔特選〕

葡萄園斜度ゆるゆると広がりぬ

浜口 佳春

「斜度」は傾きの度合いである。ゆつたりと
した園の傾斜に葡萄棚が広がっている。棚の
葡萄はふさふさと色よく実っているのだろ

う。葡萄狩りの団体が来ているのかも知れない。作者もその仲間なのだろうか。

〈佳作〉 海までの一路の日和葡萄棚

河合富美枝

雨傘のはみ出している葡萄棚

新垣 愛子

葡萄一房本堂に燭点しけり

海老沢信雄

●自由題

〈特選〉 縹渺と海秋天に利尻富士

礼文島と並んでいて、島一つが富士の名を持つ利尻山なのだ。対岸からは数十キロ離れていて、「天に」というふうには見えないから、作者は島か船上に居るのだろう。昆布や海胆を育てる海が広がっている。

〈佳作〉 一輪の野菊を挿して引越し魔

斉田 仁

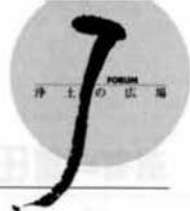
日に二便のみの漁村や秋刀魚干す

井村 善也

待つことに慣れて医院の蘭の鉢

吉崎美和子

工藤 浄真



誌上句会〈編集部選〉

■小鳥

いつも来るいつもの小鳥薄紅葉
河合富美枝
小鳥来てまぶたばちばち光りおり
工藤浄真
お御堂共に唱えし我が鳥よ
飯島英徳
小鳥来る天の昏さを少し負い
斉田 仁
秋めくや鉄扉に鉄の小鳥あり
西原規夫
青天の波柿熟れて小鳥来ぬ
井村善也

■葡萄

大粒の葡萄に和む喉仏
佐藤雅子
一房の葡萄たわなに傘寿かな
河合富美枝
山葡萄利尻富士見てたわわなり
工藤浄真

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇一〇年十二月二十日

発表・『浄土』二〇一一年二・三月号

選者・増田河郎子（「南風」主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

遠忌自由題

兼題
季語ではありません

梓二号葡萄畑の中に消ゆ

あまつぶの音忽然と葡萄棚

臨月のお腹も見えて葡萄棚

葉洩れ日の小さき粒付け山葡萄

街道に葡萄棚組み風すずし

真闇から抓みだしたる葡萄かな

■自由題

古希過ぎし店の主や新豆腐

岩陰に亀ゆらゆらと水澄める

師の遺品なりし硯を洗ひり

駆けてきて転んで七五三の朝

大柄の神主が撮る七五三

名水に浸す手ぬぐい秋うらら

にぎやかに傾いでいたる大熊手

秋高し海の見えない観測所

宿酔や猫と寝そべる秋の午後

綺麗な実ひとつもなく山葡萄

累々と皿に酢牡蠣のありにけり

新涼の書斎に拾う抜毛かな

歯科医への白き坂道曼珠沙華

留守ゆえに戸に挟むメモこぼれ萩

赤とんぼ羽根いっぱいに入日受く

斉田 仁

西原規夫

井草芳郎

井村善也

山口信子

紺野 敬

佐藤雅子

河合富美枝

山崎遣迎子

小林苑を

井口吾郎

中嶋いづる

村田 篠

井口 栞

袴田阿形

鈴木真理子

新垣愛子

佐藤ゆう

村上青女

一丁田美恵

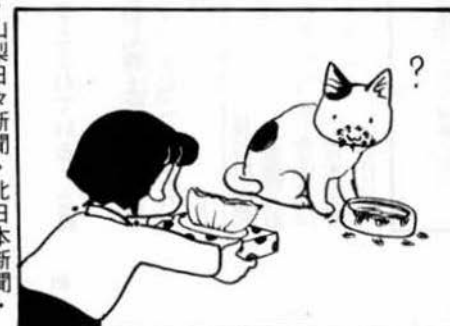
斉藤幸雄

さっちゃんね

かまちのりう



かまちのりう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



北風に服着た犬がワンと鳴く 俗洞

今年もとうとう最終の月を迎えてしましました。来年はいよいよ法然上人の八〇〇年大遠忌の年です。

法然上人にお仕えする心を表すことも大事ですが、やはり一番大事なことは、今、この現代に法然上人がお見えになつたら、どのように私たちを救ってくださるでしょうか。そのことを考えて実践することだと思います。

そこで来年の一月号は、今までこの『浄土』誌になじみの深い先生に執筆をお願いし、それぞれの法然上人像をお書き頂きながら、現代に対する提言をお願

いたしました。それぞれ大変力の入った原稿がすでに届いています。

八〇〇年前は源平の争いで世は乱れ、また大地震や干ばつと自然の猛威にも襲われていた時代でした。現代は物があふれるすごい世の中にはなりませんが、人々の心の中は、親の生死さえわからないう人々や、隣人や地域、そして家族とも縁のない無縁社会に生きる人々など、かつて人類が経験していない心の荒廃した世の中になってしまいました。

法然上人が現れたら、きっと「人間というものは物があふれ、教育が進んでもなかなか幸せにはなれないものだなあ」と言うかもしれませんね。そしてきっと

「念仏が今こそ必要とされている」と確信されるでしょう。

来年の一月号この『浄土』誌は、通巻八五〇号を迎えます。正に「正當の月です。御期待下さい。」 (長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川俗洞
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十六巻十二月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十二年十一月二十日

発行 平成二十二年十一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーデタイー

〒一〇五〇〇一 東京港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三五七八六九四七
FAX 〇三三三五七八七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・順成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口義行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

不^ふ 悉^{しつ} 成^{じょう} 満^{まん}

なお完成には至らず
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

未完成はこれからの道筋を示唆している

授業や法話を終えて、意を尽くせたと思ったことは殆どありません。気持ち伝わらなかったのではないか、誤解があったのではないかと。自分の行為に不安を持っているのですが、これは当然かも知れないのです。

心の奥にあること、価値の高いことは、言葉で表現できないのが普通です。「説明できる絵画は芸術ではない」とはルノアール。愛情や信仰も、

言葉では、その一部の表現に過ぎません。

しかし、未完成であることは、当事者に夢と希望を与えてくれるものです。見えなくても、期待を膨らませると、吹いてくる風に桜の香がすると謡った和歌があります。

霞立つ春の山べは遠けれど吹き来る風は花の香ぞする（在原元方「古今和歌集」）

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう

其の二

640円(税別)

響流十方こうるじっぽう
600円(税別)



月刊『浄土』
バックナンバー



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より